

入来牧場の乾草祭の成果と問題点

片 平 清 美

目 的

入来町に鹿児島大学農学部附属農場入来牧場が開設されて27年になる。開設当初は草地も造成されたばかりで草の収量が少なかったため、周年放牧繁殖牛で生産された子牛の体重が小さく、その後の発育も劣り、肥育しても良い成績は得られなかった。そこで、飼養管理技術の研究・開発を重ね、周年放牧方式での飼養管理では全国に誇りうる畜産研究機関になりつつある。このような中で、入来町の畜産農家から、身近に研修の場がありながら、畜産農家との交流・研修の機会がないので、畜産農家が研修できるようにしてほしいとの要望が出された。そこで、入来町畜産農家と入来牧場がお互いに研修し、畜産経営に自信のもてる技術を習得できるようにすることと、併せて牛の安全を願い牛に感謝するための乾草祭を入来町畜産農家と入来牧場が合同で行った。

平成7年度開催期日及び当日の日程

開催期日	平成7年11月10日（金）
当日の日程	畜産農家と鹿大牧場との座談会 13：30～15：00 （鹿大牧場内）
	町馬頭観音祭（町馬頭観音） 15：20～15：50
	鹿大乾草祭（鹿大牧神碑） 16：00～16：30
	各関係者との交流会（鹿大牧場内） 16：40～18：40

成果と問題点

座談会は町内畜産農家（専業、兼業、婦人部を含む）と教官及び牧場職員で開かれた。畜産農家の諸問題点及び疑問点等（表1）を前もって文章でもらい、大学側の立場で文章にして回答し、そのほかに牧場での研究資料等（表2、表3）も準備した。入来牧場と畜産農家では飼養頭数や立地条件の違いはありますが、これらの違いを乗り越えて、農業に対する不安等、具体的に直面している問題（表1）について議論した。農家から早くからこういう機会を作ってほしかったと言う意見も多く聞かれ、お互いに良い研修になった。その後家畜に対する感謝と慰霊を含め神事を行い交流会に入った。交流会は農家、町役場、農協、共済組合、大学に直接的及び間接的に関係する人達で幅広い親睦交流会が行われた。しかし、大学側で年々座談会、神事及び交流会とも出席が少なくなる傾向があります。それは乾草祭に対する考え方の違い、町と牧場との検討準備及び連絡等の不備ならびに開催時期等の問題ではないかと思われる。

大きな視野の元で職種の違いを乗り越え、前向きでお互いが理解し合い発展できるよう、早くから乾草祭の内容を検討し、多くの人に出席参加してもらい地域との交流を重ねて行きたいものです。また、これからは鹿大入来牧場では身近な地域に少しでも貢献できる開放された牧場として利用される環境づくりをして行かなければならないと考えます。

表1 畜産農家の諸問題点及び諸疑問点。

- 質問1 子牛の下痢について
生後1週間から20日までの下痢の原因と、下痢を防ぐにはどうしたらよいか。
また、餌付けの時期との関係はないのか。餌付けはいつ頃が良いのか。
- 質問2 発育の良い子牛を作る技術？
- 質問3 子牛の最適な離乳時期はいつがよいのか？
- 質問4 同じ母牛に同じ種雄牛を交配しても子牛に大小があるのはなぜか？
- 質問5 受精卵移植が普及しているが、今後の受胎率はどの程度まで向上がみこまれると思いますか？
- 質問6 肥育牛の除角と肉質との関係は？
- 質問7 育種価と肉質との関係は？
- 質問8 現在高級肉作りに生産者は集中していますが、将来も高級肉（霜降り肉）の需要が増えると思いますか？
- 質問9 肉質を追求している現在ですが、但馬の血がどこ（父、祖父、曾祖父）にあったものがよいと思いますか？
- 質問10 子牛価格（枝肉）は今後どのように動く見通しですか？
- 質問11 高齢化が進めば牛飼いが少なくなると思うが、国は後継者対策はどうするのか？
肥育素牛が不足するのではないだろうか？
- 質問12 繁殖牛の粗飼料、稲ワラ給与で、長いままと細断があるが、どの方法がよいのか？

表2 研究資料

- 1) 薩摩子牛市場における各開催月市場の上位20頭までの血統、生後日数及び体重の事例。
- 2) 薩摩子牛市場における上位100頭の日齢、体重、日齢体重、精液（父）、母牛得点等の相互関係の分析。
- 3) 薩摩郡内の4肥育センターにおける肥育成績の分析。

表3 入来牧場での研究テーマ

- 周年放牧生産子牛の初期発育と産肉能力との関係。
- KC菌の活用に関する研究。
- 子牛の離乳ストレス軽減に関する研究。
- 卵巣除去雌牛の産肉能力に関する研究。
- 冬季放牧に関する研究。
- 子牛の初期発育におけるハイセルバガスの効果に関する研究（計画中）。